

酒田港からの混載による 日本酒の輸出

「清泉川」醸造蔵元 株式会社オードヴィ庄内
事業推進部部长
佐藤 寿郎

実証事業スタート

今回の輸出事業への挑戦は、昨年の春に、弊社醸造の日本酒のシンガポールに向けた輸出にご尽力頂いた(株)LCCTレーディング代表取締役の東範男さんより、令和4年度農水省「輸出物流構築緊急対策事業」へのエントリーについて相談を受けことが切っ掛けでした。

その際に、酒田港には一度も訪れたことが無かった東さんに対して、酒田港を活用した農林水産物・食品等の物流ルート確立について、是非検討して欲しいとお願いし、その構想を元にしてLCCTレーディングを事業主体として申請を行いました。結果、見事に農水省より認められ、昨年秋口よりシンガポールを輸出先に定めた実証事業がスタートすることになりました。

実証事業の課題と成果

(1) 地方港の活用による低コスト輸出

要冷品を小ロットで輸出する手段が乏しい現状に対して、冷蔵コンテナによる混載輸送で実現可能となることの実証を目指しました。

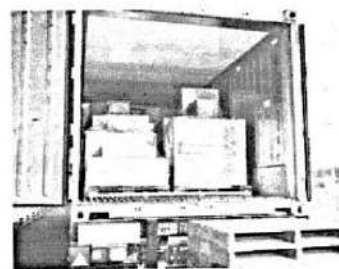
例えば、日本酒720ml瓶×12本入り箱(約15kg)を国際クール便(航空便)でシンガポールに送るとなると、最低でも輸送費が3万円程度発生しますが、冷蔵コンテナで送った場合、所要日数に差が出るにしても、温度管理を行いながら輸送コストは国際クール便の1/10、3,000円まで圧縮できることが判明しました。

(2) 農産物及び関連商品の産地混載モデルの導入

酒田港のある山形県庄内地域をターゲットエリアとして、混載する農産物及び関連商品を探し、山形県が誇る特Aランク連続13年の日本一美味しい庄内産米「つや姫」と、お米を原料とする「日本酒」に着目しました。山形県庄内地域には400年以上も続く酒蔵もあり、今でも18の酒蔵が美味しい日本酒を醸造しています。今回実証事業に参加して頂くことができた企業は、農業法人1社、酒蔵5社、どぶろく醸造蔵1社、味噌・醤油をベースにした「酒の肴」を製造している食品加工会社1社です。

混載のメリットは、20ftコンテナ40%の積載率においても、シンガポールまでの輸送費は、日本酒720ml瓶1本あたり250円/1ケース12本換算で2,953円となり、3,000円という目標をクリアできることです。この結果を受けて、今後の混載における輸送コストを想定すると、積載率を上

げて日本酒をベースカーゴとし、空きスペースに農産物(米・青果)等を混載することにより、日本酒は720ml1本あたり200円前後、農産物はkgあたり50円前後に抑えることが可能と判断されます。



コンテナへの積み込み

(3) 酒田港の輸出拠点化に向けた検討

酒田港は、江戸時代に河村瑞賢によって整備された北前船が行き交う西廻り航路の中心的な湊町として発展し、現在は山形県唯一の重要港湾としてインフラ整備が進められています。トラック輸送の2024年問題や脱炭素化・SDGsへの対策が全国的に求められ、鉄道輸送や内航船輸送が見直されているこの機会に、先ずは山形県内の企業が、身近な輸送手段として、酒田港のコンテナ航路の利用を意識するところから始め、国内輸送に限らず酒田港が世界に直結する海外輸出への拠点であることに目を向けるべきと強く思います。



第1船酒田港出港

今後の展開に向けて

今回の実証事業では、「庄内テロワールフェア in シンガポール」と題し、輸出した物産を現地シンガポールにて紹介する各種イベントを開催しました。

3年ぶりに2月23日に行われた、在シンガポール日本国大使館主催「天皇誕生日レセプション」では、現地政財界人をはじめとする800名以上の招待客に庄内の物産を提供し、絶賛されました。

また、同月25日には、日本大使館が管理運営するJCC(ジャンクリエイティブセンター)においても、LCCTレーディングが独自に「庄内テロワールフェア」を開催し、300名以上のシンガポール人に対して試飲・試食会を行い、庄内の物産の魅力をアピールしました。

これを機会に、国土交通省は勿論のこと、地元の行政及び山形県との連携を模索しながら、輸出を目指す地元企業と協力し、民間レベルで酒田港の利活用について具体的な展開を行っていきたいと思います。



天皇誕生日レセプションブース